
とある科学の最終術式（イマジンプレイカー）

パラドックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の最終術式
イマジンプレイヤー

【Nコード】

N6721K

【作者名】

パラドックス

【あらすじ】

とある深夜の午前3時。学園都市第七学区に異変は起こった。次々に起きる事件。それは学園都市がつけられた当初から計画されていたある計画が絡んでいた。（この小説は上条当麻が本当にどんな時でも挫けずに立ち向かえるのか、御坂美琴をレベルアップさせるとどうなるのか？そんな疑問から生まれた作品です）魔術・科学どちらも出ます。事情により題名を変更しました。内容も訂正いたしました。

第一章 天使 Infinite Magazine

12月10日、午前2時40分。

学園都市から遙か離れた太平洋。

その日本海溝の底の底。水深6000メートルの光も届かない世界の中、その円柱のような物体は不気味な音を上げていた。

その物体から光は出ていなかった。周りに置かれた潜水艇のライトのような白色光がただその白い物体を照らしていた。

円柱のような形状をしたそれは、おそらく水圧に耐えるような構造になっているのだろう。少し普通の円柱とはどこか違っていた。

どこか異質な感じを思わせる、闇に浮かぶ数十メートルの白い箱。

「^{わがくに}米国の最終兵器。インフィニットマガジンか……」

その光景を調査船にのせられた最新型の観測機器を使って監視していた白人の男が、そんな言葉を漏らした。

オレンジの光を発しているコンソールにうつる文字。

『Infinite Magazine』

「何でもいわるレーザー兵器らしいよ。数十年前、この海の底に

埋葬された。何故沈められたかは知らんが」

その隣でコンソールを操作していた東洋系の男が少し笑いながら呟くように言う。

「!」

隣からいきなり声が聞こえ一瞬ビクツとしたが、声の主が数日前から一緒にここで働いていた東洋人の男だったので内心少しほっとする。

「はあゝ……………何で、沈められたんですかね？」

「さあな。まあ、知る必要がないんだろうよ。公式の、まあ極秘の内容だが、それによると『自己誘導透過性を示す非常に高エネルギーで非常に短い時間枠で区切ったコヒーレントな光の束を発射する箱』だそうだ。可視波長光によるパルスレーザーってところか。まあ可視光つくくらいだから時間枠はフェムト秒程度が限界だろうかね」

東洋人の男は一度声をあげて笑うと、まあ全て憶測だがな、と付け加えた。

白人の男は、それを聞いてやや間が抜けた表情でその物体を見ている。

「はあゝ。そんな昔にアメリカでそんなものが作られていたなんて、驚きです……………」

「……………科学技術は日々進歩する。だがこの兵器は、今この時

代でもあの日本の学園都市に唯一匹敵する科学技術だと言われている。まさに古代兵器の域だよ。まあそういうこともあってこの兵器はこの海のまさに底に沈められたのかもしれないが……………」

「どういうことですか？」

「つまりこのインフィニットマガジンと呼ばれる兵器自体があまりにも高度な技術を使って作られたものだった。そのSFとしか言えないような技術を米国は恐れ、その不明な技術を自分たちの目に付かないような場所に隠した。人間っていうのはアンノウンなものを恐れるという習性があるからな。…………まあこれも憶測だが」

言い終わると東洋人の男は小さく笑う。

その東洋人の容姿は学生のようにも見えた。制服でも着れば立派な学生になれるだろう。

彼の右の手のひらには、何やら見たことがある紋章のようなものが書かれている。

いや、紋章というより図だろう。何だったか、度忘れしたようだ。

瞳の色は青。こちらではそれほど珍しいものではないが、黒髪に蒼の瞳と言つとあまりいないのではないだろうか。

何というか、不思議な感じだった。

とにかく不思議だった。思わず好奇の目で見る。

国の極秘事項に精通し、またその絶えずニコニコと笑っているだけという性格もただ不思議な感覚だった。

思えばここ数日ずっとこの男は笑っていたような気がする。はじめにIDを見せられた時も、そのあとの仕事中也。

数瞬の沈黙が、ごつごつした機械類が置かれた部屋の中に訪れる。

「・・・・・・・・・・そういえば今日は静かですね。まあ夜中ですから当り前ですけど・・・・・・・・」

その沈黙が何となく居心地悪くなり、焦ったように少し声のトーンを上げて何とか言葉を紡いだ。

「・・・・・・・・・・そうだな・・・・・・・・」

だがそんな話題で盛り上がるはずがなく、その男は平坦な声でそれだけ言った。顔はいつもと同じく笑っていた。

その質問をしたときに男は僅かに眉をひそめた。もしかするとこういう場つなぎ的なものが嫌いだったのかもしれない。

笑った顔のまま、静かに画面を見つめている。

そしてそのまま5分ほど経過しようとしていた時、はりついた口を開く音が部屋に響いた。

「・・・・・・・・君は、『オイラーの等式』と呼ばれる数式を知っているか？」

「『オイラーの等式』？」

自分は理系ではない。それでも何となく、何となくではあるが聞いたことがあった。

「確か、・・・・・・・・世界で最も美しい数式、のことでしたか？」

「そう。たったひとつの数を使って結ばれた美しい数式だよ。まああまり覚えているような人間はいないんだがね。・・・・・・・・
・私はあの数式を目標としているんだ」

「目標？」

数式を目標とするとは一体どういうことなのか。

その『目標』とやらを聞いてみたい気もしたが、

「ああ。・・・・・・・・だが多くは語らないでおこう。まだその目標にはほど遠いのでね、もう少しすれば状況は変わるかもしれないが・・・・・・・・」

その目標については話してはくれなかった。

おそらく何らかの事情があるのだろう。例えばこちらにその極秘情報を書く資格がないという可能性もあり得る。そう考えれば今まで自分にアクセス権がある情報だけを彼が言っていたのも頷ける。そのため深く考えないことにした。

「・・・・・・・・・・そうですか」

それだけその男に言った。

また沈黙が舞い降りる。

そしてそのあとに、また男は一言呟いた。

「・・・・・・・・・・ああ、そういえばその『最終兵器』とやらのあだ名、
と言っているのかな？何やら面白い名前がつけられていたな。誰か
がこの海の底に沈むこの白い物体を見て思いついたんだろう。たし
か、・・・・・・・・・・『天使』だったか」

第一章 天使 Infinite Magazine (後書き)

すみません。訂正しました。

第一章 御坂美琴 P e r s o n | O f | O r d e r (前書き)

訂正しました。すみません。

第一章 御坂美琴 P e r s o n | O f | O r d e r

12月10日、午前5時。常盤台中学。

「はあゝ……………」

溜息をつきながら、御坂美琴は自室のドアを開けた。

中は真っ暗。もちろん外も真っ暗。

廊下の温かな赤みがかった明かりだけがその部屋の中に光を齎す。

「あー……………今日も徹夜って……………もう最悪よ!!」

ドアを閉めて部屋の中に入ると、そのまま美琴はベッドに倒れる。

顔はわずかに紅潮し、髪にはこの薄闇でもわかるほどにはつきりと見える汗の玉。

彼女が何をしていたかと言うと、走っていたという言葉に尽きるだろう。

まあパートナー付きだが。

「…………クソツたれが。大体何でアイツは当たらないわけ？別に死にはしないってのに……………」

何だか常盤台のお嬢様の品格も何もないような言葉が冷たい空気を

振動させている。

彼女の言う『アイツ』とは言わずもがな、件の少年、上条当麻である。

結果からすればいつもの状況を作ったにすぎない。何やらいつも通りいろいろな不幸に巻き込まれていたその少年を見つけ、ずいぶん長いこと使っていなかった『勝負』という理由をつけて一方的な攻撃を行う、というものの。

あまりにいつも通りの展開すぎて自分の進歩の無さにあきれた。

何というかそんな『勝負』とか言う言葉を使わずに何とかならないものか。つまり普通に約束を取り付け、普通にその時間を過ごせないかということだ。

「
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・ あー！！もうこんなことに悩むのは時間の無駄だーっ！
・ ・ ・ ・ ・
！シャワーを浴びて寝る！！」

美琴は乱暴に髪を掻きむしり、ベッドに顔を押し付ける。

答えはいつも簡単だ、と今更ながら確信する。

だがその答えは彼女にとっては難しい。あまりにも難しい。難解なパズルとかそういう問題以前に、既にこの世から消え去った失われた遺跡を探しているようなものだ。

なぜなら美琴はその感情に気付いてしまったから。

彼女の能力は彼女自身の努力によって作られた結晶。

それと同じで、彼女のこれまでの行動が今現在の彼女の行動を有らしめ、そして同時に束縛しているのだ。

美琴は顔をあげるとシャワーを浴びるためにバスタオルを取り出す。

タオルを手につかみ、一度動きを止める。

「……まあいずれは考えなきゃいけないんだろうけどね。
……」

本日何回目かの小さなため息を口の中で吐く。

だが、だからと言って今この瞬間に答えが出るわけではないことを彼女は知っていた。だからこそ、今必要なことは何なのかすぐに判断がついた。

とにかく休養である。

まずそんな心の問題、それも答えが出るのかもわからないような問題を考えるためには余程の余裕がなければ無理だ。

まして、一晩中走り続ける、とか言う『えっ?! マラソン選手なんですか?』とでも思われてしまうような運動の後ではそう簡単に疲れがとれることはない。

今必要なのはこの汗を洗い落とすこと。とにかく今が大事だ。

「もうびしょびしょ! 冬とは言っても何時間も走るとこんなことに

なるのね……。あーもうめんどくさい！」

とりあえず服を脱ぐ。脱いだ服は元の重さよりもさらに重くなっていた。

まさにビショビショという表現が適切なほどにビショビショだった。隣のベッドをちらりと見た。そこには誰もいない皺のないベッドが一つ。

ルームメートの白井黒子は、何でも風紀委員の仕事とかで第一七七支部に行っているらしく、3時少し過ぎ位にメールでその連絡が来た。

この夜中に一体何の仕事なのかとも思ったが、結構な緊急事態だったらしい。メールの文章にも誤字がかなり入っていた。

そういえば午前3時くらいと言えば、かなり大きな地震があったよ
うな気がしたが、もしかするとそれと関係があるのか。

念のため携帯電話を開き、ニュースを確認してみる。

「えーっと、ニュースニュースと……」

ポチポチと携帯電話を操作する。

別に彼女的能力『超電磁砲^{レールガン}』を使って瞬時に情報を手に入れることもできるが、そんなニュースの情報を手に入れるために愛用の携帯電話を破壊、なんてことをするつもりはない。

すぐに情報は携帯電話の画面に表示された。

「えーっと、何々。．．．．．うん、別に学園都市が震源、とかそういうわけじゃないのね」

ふう、と安堵の息が漏れる。

何となく嫌な予感がしていたのだ。

学園都市で何か起きて、それが原因でさっきの地震が起こった。

そんな根拠もない推測が何故か自分の頭の中で、事実なのではないか、という疑念を生みだしていたのだ。

それが今一気に消え去る音を聞いた。

すると、動揺が消えたせいか、

「．．．．．ん？ってメールきてるし」

ここでメールがきていたことに気がついた。

差出人は、白井黒子。

噂をすれば、と言ったところか。

急いでメールを開く。

それを見た瞬間、美琴は顔をしかめた。

DeAR MikOTO,

[NiFe]

101101101111

UpTIpX QwT SXuSRvh
UjWxotS Wn [x]

「はああ??」

突然のことに間抜けな声をあげる。

自分の意外なほどの声の大きさに驚き、大急ぎで口を押さえ周りを
キョロキョロする。

これだけみれば単なる挙動不審である。

それでも美琴は、自分が挙動不審と言われてもそれを払拭するだけ

の証拠を持っていると確信していた。

一体このメールは何なのか。

知っているはずの少女から届いた謎のメッセージ。そもそもこれがメッセージなのかも疑わしい。

[illegible]

英語っぽい感じもあるが、何となくそれに見えろと言っただけでよくわからない。

美琴はよくわからないと言つた感じでその文字が映っている画面を見つめる。

おかしい。

いや、どう考えてもおかしい。

第一章 御坂美琴 P e r s o n | O f | O r d e r (後書き)

すみません。訂正しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6721k/>

とある科学の最終術式（イマジンプレイカー）

2010年10月14日13時52分発行